

【論文】

ヴェルディヴ事件の子供たちとパリの文壇

安原 伸一郎

要旨

ナチス占領下のフランスにおけるユダヤ人迫害のなかでも、1942年7月のヴェルディヴ事件は、とりわけ子供たちの検挙という点でもっとも衝撃的なものである。フランス警察は、パリ地方に住む外国籍のユダヤ人たちを検挙した後、フランス国内の収容所において子供たちと親とを引き離した挙句に、子供たちをもナチスの強制収容所へ移送したのだ。この一斉検挙は、早朝から日中にかけて行われたにもかかわらず、当時パリにいた作家たちは、ジャン・ゲーノら少数の例外を除いて憤慨を示さなかったばかりか、ロベール・ブラジヤックをはじめとする反ユダヤ主義作家は、子供もまとめて移送すべしと主張するに至った。そんななか、多くがペタン派だったカトリックの聖職者たちが、フランスのユダヤ人迫害に対して公然と異議を唱え始める。他方、ヴェルディヴ事件を生き延びた子供たちは、この歴史的出来事を、細部にこだわる子供の眼差しでもって証言しており、その証言の背後にいる、移送され虐殺された他の多くの子供たちの存在を思い描かせてくれる。

0. はじめに

1942年7月16日早暁から17日にかけて、パリとその近郊に住む外国籍ユダヤ人の一斉検挙がフランス警察によって行われた。通称ヴェルディヴ事件の発端である。ヴェルディヴとは、パリ市内にあった冬季競輪場のこと。この事件は、「ホロコースト」や「ショアー」¹などとししばしば一括りにされかねない第二次大戦期のヨーロッパにおけるユダヤ人虐殺のなかでも、重要な一つの出来事だった。

1940年6月、ドイツ軍の進撃を前に、パリを無防備都市としたフランス政府は、本土の北半分をドイツの占領下に置き、南半分はフランス国 (Etat français) として存続させる独仏休戦協定を結ぶ。その国家元首となったペタン元帥は、その後ほどなく首都をヴィシーに置き、対独協力政策を推進するヴィシー政権を誕生させる。こうして、「1940年10月3日から翌年の9月16日にかけて、ユダヤ人に関する26の法律、24の政令、6の省令」²が出され、ユダヤ人を宗教ではなく人種として定義して種々の職業から追放するなど、占領当局の動きに合わせて——時にはドイツの期待以上に——国内のユダヤ人に

対する弾圧が次第に強められていく。41年11月には、強硬な反ユダヤ主義者だったグザヴィエ・ヴァラを長とするユダヤ人問題総局の要請で、在仏ユダヤ教徒総連合(UGIF)³が設立され、フランスに住むユダヤ人は全員、登録を義務づけられる。そして42年5月には、占領地域のユダヤ人に対して胸に黄色のダビデの星を着用することが義務化され、ユダヤ人が誰の目にも識別されるようになった後、ついに「春の風」作戦が実行される。これは、ドイツが占領したフランス、ベルギー、オランダの西欧三ヶ国から10万人を超えるユダヤ人を、労働を通して殲滅すべく東方に移送するという作戦だった。

ショアーのなかでも、この「春の風」作戦の一つであるヴェルディヴ事件の類を見ないおぞましきは、子供たちが親と引き離された挙句に虐殺されていった点にある。検挙された子供の数4115人、そのうち最終的に収容所に移送された子供は4051人（なお、成人男性の逮捕者は3118人、女性5919人）。すでに41年春以降、占領地域を主として、フランスでも幾度かユダヤ人検挙は行われていたが、このヴェルディヴ事件では「初めて、老若男女が——時には隣人たちや沿道の人びとの眼前で——検挙されたのであり、この不可触民を満載したバスの光景が、道行く人びとに見られないはずはなかった」⁴。だとすれば、この事件は、ユダヤ人弾圧を日常としていた当時のフランス人たちにとってさえ、ある程度の衝撃をもって受け止められたのではないか。

ヴェルディヴ事件の残酷さについては、2010年の映画『黄色い星の子供たち』（ローズ・ボッシュ監督）などでも伝えられているが、フランス国内の収容所で子供たちが親と引き離された経緯や実態については、まだ十分には論じられていないように思われる。そこで本論では、ヴェルディヴ事件の現実、および当時のパリの人びとの反応を眺めつつ、この事件に巻き込まれた子供たちに焦点を当てて、当事者たる彼ら彼女らがどのようにこの事件を生きたのかを検討したい。

1. ヴェルディヴ事件における子供の扱い

1942年1月のヴァンゼー会談で「ユダヤ問題の最終解決」の段取りが決定・確認されたのに伴い、6月には、ユダヤ人男女10万人を東方移送すべしとの指示がパリに届く。ヴィシーでは、すでに4月に、対独協力を積極的に進めるピエール・ラヴァルが首相兼内相として政権に返り咲いており、警察長官にはルネ・ブスケが任命されていた。占領当局を前にしてフランス警察の自律性を高めたいと願っていたブスケ、およびパリにおける警察長官代理のジャン・ルゲらと、SSのカール・オーベルク、テオ・ダネッカーやハインツ・レトケらドイツ当局との幾度かの協議を経て、7月4日には、「ヴィシーから出されたいいくつかの異議を超えて、占領地域か否かを問わず外国籍のユダヤ人（ダネッカーは報告書で「無国籍」としている）の「避難」については難なく妥結される」⁵。ベルリンが、国籍を問わず労働力たりうる青年以上の全ユダヤ人の移送を求めたのに対して、フランス側はそれでも、フランス国籍のユダヤ人については移送から除外しようとしていたのである。7月7日の会議では、外国籍のユダヤ人のうち、「出産間近もしくは乳児を抱えている女性」および「アーリア人と婚姻関係にあるユダヤ人」を除き、「16歳か

ら50歳、そして健康状態によっては15歳の子供たち」2万2千人の検挙が具体的に計画され、パリにおける逮捕者は、ドランシーをはじめとしたフランスの収容所とヴェルディヴに振り分けられることが決定された。その際、「15ないし16歳未満の子供たちについてはUGIFが世話を引き受けることになる」とされていた⁶。

だが、7月4日の段階で、「非占領地域のユダヤ人家族を避難させる際に16歳未満の子供たちも連れて行くよう提案し、[...] 占領地域に残るであろう子供のユダヤ人については、自分は関知しない」⁷としていたラヴァルは、7月10日の閣議において、占領地域の子供についても、「人道的見地から、16歳未満を含む子供たちを親から引き離さない許可を得たことを明らかにしている」⁸。なるほど、これは一見すると「人道的な」発言に見えなくもないが、フランスの世論を恐れたのか、あるいは親と引き離した場合に生じる惨しい孤児たちの扱いに苦慮することを予期したのか、ラヴァルのこの発言の真意がどこにあるかについてはさまざまな仮説が立てられている⁹。しかし事実として、ダネッカーは、UGIFには4000人もの子供を引き受ける能力がないことを確認したうえで、パリの養護施設でユダヤ人以外の子供とユダヤ人の子供が混じることを恐れ、ラヴァルの提案を受け入れる意向を示し、現場の指揮官たるパリ市警察署長のエミール・エヌカンは、7月16日に始まるパリの一斉検挙にかんする12日付の通達で、「検挙対象の人物と暮らしている子供も、その住居に家族が誰も残されない場合には同じく連行される。隣人に預けられてはならない」¹⁰との指令を出すことになるのだった。ヴェルディヴ事件ではこうして、2歳未満の子供とその母親、60歳以上の男性および55歳以上の女性、そして非ユダヤ人と婚姻関係にあるか死別した人を除いて、パリに住む外国籍のユダヤ人はみな逮捕されることになった。この事件で犠牲となった子供のうち、実に3000人はフランスに生まれたフランス国籍所有者だったのであり、たとえ家ではイディッシュ語を用いることがあったにせよ、フランス語を母語とし、フランスの教育を受けていたのである。そもそもフランスは、伝統的に移民に対して開放的な国だが、だからこそとすべきか、その牙が内なる他者である人びと——フランス革命期には反革命派、第二次大戦期にはユダヤ人たち——に向けられるや、恐るべき全体主義的国家へと変貌する。重要なのは、ナチスに本土の北半分が占領されたフランスが、文字どおり協働してユダヤ人に対する圧政を行った点である。

予備隊も含めて計4660名のフランス警察によって7月16日午前4時に開始された一斉検挙は、翌17日13時まで行われ、1万人を超える人びとが逮捕された。もっとも、この作戦は完全に秘密裡に計画されていたわけではなく、事前に噂を聞きつけた人はパリから逃げ出すことができた。だが、荒唐無稽な噂話として、ユダヤ人の間で一蹴されてしまうこともあったという。事件当時14歳だったガブリエル・ヴァクマンは、事件前の自分の周囲の様子を次のように伝えている。「1942年7月15日。町には噂が流れていた。まるで内緒話をするかのように話されていた。「あんた方はどうやってそんなことを知ったというんだ？」[...]「たぶん警察の誰かが知っていて漏らしたのさ。「春の風」という名前だとも言っていた」[...]「まったく何を言ってるんだ？」」¹¹。もちろん、いくら早朝に不意打ちを食らうとはいえ、敏捷な子供たちのなかには逃げ出す者もあった。し

かし、「そんな子供たちもまた、いったいどこに行けばいいのか分からぬまま、再び捕まることになった。[...] 子供たちは「ママに会いたい」のだから。当然のことだ」¹²。検挙時の絶望や恐怖による自殺は、把握されているだけでも100件は下らない。そしてUGIF といえば、ユダヤ人問題総合局から、移送予定のユダヤ人たちに対する物資の供給を内密に要請されていたわけで、この一斉検挙についての情報を事前に得ていたのだが、副委員長だったアンドレ・ポールは、パニックを引き起こすのを恐れて、「広範囲に及ぶ新たな移送が控えていることをユダヤ人たちに知らせるのは、私たちからすればとりわけ危険に思われる」¹³と応じたのだった。

他方で、この「暗黒の木曜日」に概ね粛々と作戦を遂行したものの、フランス警察と一枚岩ではなかった。「我々の命令は絶対だ。少しでも逃亡の恐れありとすれば、我々は所構わず発砲する」¹⁴と脅迫した警官もいれば、検挙対象者に対して2日分の食料を準備するよう言い渡し、「あまり遠くまで行かないように。私はあんたたちの荷物を見ておくから」¹⁵と買いに行かせた——すなわち暗に逃亡するよう促した——警官もいた。このことから、たとえ絶対的な命令が下された局面においても、そしてどれほど些少なものであっても、人間の自由裁量の余地がまったくなくなってしまう事態は実のところかなり稀であることが窺われる。

そして隣人にも、同じようにさまざまな人がいた。「一斉検挙の翌日、[管理人の] T 夫人は私の親の住まいから、羽根布団や毛布、衣類、食器類を略奪し」¹⁶たし、身を潜めているユダヤ人一家について、「あいつらはそこにいませんぜ。6階にいるんでさ」¹⁷と警官に密告する労働者もいた一方で、「目の前で起こっていることをすべて理解しているのに、身じろぎもせず、突如としてユダヤ人に変身して[黄色い]星の保持者になるのを恐れているようだった」¹⁸周囲の傍観者たち、あるいは「逃げなさい、家に戻っちゃダメよ」¹⁹と、買い物に来たユダヤ人の子供に声を掛ける商人もいた。当日のパリ市警察の報告書によると、パリ市民は、子供たちに対する眼前の検挙や連行に加えて、子供たちが親と引き離されて養護施設に預けられることになるかもしれないという噂を聞き及んでおり、これらを「非人間的な措置だと見なし」、「政府および占領当局に対する厳しい批判を惹起」²⁰することになるだろうと予想されていた。

検挙された人びとは、計画に沿ってまず区ごとに集められ、独身者や子供のいない人（男性1989人、女性3003人）は直接ドランシーへ、子供連れの人（男性1129人、女性2916人、子供4115人）は一時的にヴェルディヴに収容された。ドランシーからは、早くも7月19日に、今回の一斉検挙で連行された人びとのうち約1000人を乗せた最初の列車がアウシュヴィッツに向けて出発している。一方、ヴェルディヴへ収容される人びとは、バスに詰め込まれてヴェルディヴへと移送された。

フランス憲兵隊の監視下に置かれたヴェルディヴの状況は、酸鼻をきわめるものだった。17日にヴェルディヴを訪れたUGIFのポールは、「時々、若者たちが水の入ったバケツを持ってくると、金属製のコップや鍋、あるいは空き缶を手にした人びとが殺到する。[...] 子供と病人しかいないような印象だ。これだけの人数がいるのに、担架やマットレスは50ほどしかない」²¹と記しているが、そのうち水や食料もなくなっていく。実際、

ヴェルディヴから密かに外の世界に届けられた手紙には、「私たちのもとにはもうほとんど食べ物がなく、ほとんどすべてのものが不足しています。それにしても、あとどれくらいここにすることになるのでしょうか？」²²といった切迫した文言が見られる。こうした環境のなか、人びとは最長でほぼ一週間、ヴェルディヴに収容された。衛生状態も悪化し、「ただでさえ数少ないトイレは機能しないうえに詰まっていて、直せる人は誰もいなかった。みんな、壁際に排泄するよりほかない。一階には病人たちがいるが、横に置かれた尿瓶は満杯だ。どこに捨てていいのかわからないのだ」²³。監視するフランス人警官に詰め寄ったとしても、「それはできない」と繰り返すばかりで、途方に暮れているようだった²⁴。7月16日から19日まで、赤十字から看護師が送られてくるが、手当や治療に必要な物資は欠けており、水道も止められているとあっては為す術がない。このような状況下で、精神錯乱や自殺未遂も発生し、5日間で、複数の子供を含む30名ほどの死者が出ている。

そしてこの人びとは、子供も含めて、7月19日から22日にかけて漸次、パリのオーステルリッツ駅から貨車に乗せられてピティヴィエとボヌ・ラ・ロランドの中継収容所に移される。この二つの収容所は、第二次大戦が始まった1939年、パリから遠くなく鉄道網が整っているという理由から、オルレアンに県庁を置くロワレ県に、ドイツ軍の捕虜を収容すべくフランスが建てたものである。フランス敗北後には、占領当局によってフランス軍捕虜の一時的な収容所として用いられ、パリで最初のユダヤ人検挙が行われた1941年5月以降は、フランス当局が「ユダヤ教徒の一時収容所」として用いていた。ヴェルディヴ事件以前にドランシーやピティヴィエに捕えられていた人びとは、やはり劣悪な環境に置かれていたが、この検挙に際して、相次いでアウシュヴィッツへと移送された。

それにしても、なぜ子供連れの人びとは直接ドランシーに収容されなかったのだろうか。それは、占領当局も、そしてフランス側も、子供の扱いに苦慮したからにほかならない。パリとその近郊で2万2千人という作戦計画時の数字には遠く及ばない実際の検挙数に鑑み、ドイツ当局との軋轢を避けるべく少しでも移送者数を上積みしておきたいと同時に、孤児となるであろう子供たちの処遇は困難であると判断していたフランス側の意向、そして、相変わらずこれらの子供の扱いについては指示を出さないベルリンを前に拱手する占領当局、さらに、ヴィシー政権に対するフランス世論の反発を恐れて、子供と親との別離が必要となった場合でもできる限り人目につかない形で行いたいというルゲらの思惑があった²⁵。こうして、子供連れの人びとはまとめてロワレ県の収容所に入れられたにもかかわらず、7月28日、「官僚的ジレンマは速やかに解決された。すなわち、ロワレ県に収容されている移送可能な親たち（主として母親）を移送することにし、まだ移送命令が下らない子供たちの件を先送りにするのだ。[...]そこでジャン・ルゲは、オルレアンの知事に対して、ロワレ県からドイツに直行する最初の列車を準備するよう指令した」²⁶。つまりフランス当局は、当初の予定数に足りない移送者を、ヴェルディヴ事件で検挙した子供をもつ親たちで埋め合わせることにしたのである。このようにして、子供たちは先に東方へ移送される親たちと引き離されることになった。

7月31日朝、ピティヴィエからアウシュヴィッツに向けて、1049人（男性693人、女性356人）を乗せた最初の列車が出発した。ボヌ・ラ・ロランドに収容されたアネット・ミュレルは、「みんな収容所の真ん中に集められた。子供たちは母親の袖にしがみついていた。私たちには、杖や警棒が振り下ろされ、冷水が浴びせられ、引き離されようとしていた。阿鼻叫喚だ。憲兵たちは母親から衣類を剥ぎ取り、なおも宝石や金を探していた」²⁷と、親と子供が引き離される際の暴力的な光景を証言している。こうした様子はしかし、数日間にわたって繰り返されたのである。ピティヴィエの看護師を務め、自身も9月にアウシュヴィッツに移送されることになるヨハネス・ヴェルトハイムは、その様子を次のように伝えている。「この日のことは記憶から消え去るまい。残る人も出発する人も、何人もの女性が気を失い、子供たちは、父親や母親の名を呼びながらずっと泣き喚いていた。[...] それでも、生活は奇跡的に続く。彼ら彼女らの乗車から12時間後には、誰もが我に返って、次の出発が用意されるのだ」²⁸。

このような、15歳以上の青年を含む大人の移送は、およそ8月7日まで続く。その結果、ピティヴィエとボヌ・ラ・ロランドには子供たちだけが残ったわけだが、8月12日、ついにベルリンの国家保安本部から子供の移送許可が届く。それにはしかし、翌13日になって、「適切な割合で」という狡知に長けた条件が付されるのだ。すなわち、子供たちを「アウシュヴィッツ行きの予定された各列車に少しずつ分乗させても構わない。だがいかなる場合でも、子供たちのみを乗せる列車を運行してはならない」²⁹。恐るべきことに、子供と大人が乗っていれば、労働のための親子の移送だと考えられるだろうから、然るべくカモフラージュすべし、という命令なのだ。未決定の状態からこのようになし崩し的に、8月15日以降、子供たちは、親と引き離された挙句に、ピティヴィエとボヌ・ラ・ロランドから移送されてしまう。「8月15日、私たちはお母さんに会いに行くために出発するんだと聞かされました。ほとんど子供たちだけ、それもほんの幼い子供までもが、家畜車に乗せられました」³⁰と、アネット・クラジセは自らの体験を語っている。もちろん、その頃すでに彼女の親たちはアウシュヴィッツに直行していたのだ。この子供たちの最終目的地も大人と同じアウシュヴィッツなのだが、彼ら彼女らは一度、ドランシーに連れて行かれた。非占領地域からドランシーに収容されていた見も知らぬ大人たちと一緒に乗せるためである。

そしてドランシーを出発したこの子供たちは、誰一人、生きて帰ることはなかった。

2. ヴェルディヴ事件に対する当時のパリの反応³¹

なるほど、パリは、当時すでに200万人以上の住民を数える大都市であり、検挙され連行されたのは、その0.5%ほどの1万3千人ほどではあった。それでも、早朝から日中にかけて、人目を憚らず遂行された一斉検挙は、人びとの注意を惹かないわけがなかった。先に見たように、検挙を目の当たりにした町の人々はさまざまな反応を示していたし、パリ市警察は、フランス側が批判の矢面に立たされるのを危惧してもいた。そして、当事者の周辺の人びとによっても、この一斉検挙が観察され記録されている。パリの

UGIF で働き、後に自身も強制収容所に移送され死ぬことになるユダヤ系フランス人学生、エレヌ・ベールは、死後に公開された『日記』の7月18日の欄に、「きょう、やっとこの日記に戻れる。木曜日 [7月16日] には、人生がそこで止まったかと思った。でもつづいた。また始まった。[...] ビエデル夫人は追い詰められた獣のようだ。自分の身を案じているのではない。子どもたちから引き離されるのが怖いのだ。彼らは、床をはっていた子どもたちまで連れて行ったという。[...] /わたしは忘れないために、急いで事実を記している。忘れてはならないから。/ [...] 子どもたちは、二度と両親に会えないだろう。おとといの夜明けに起きたこの出来事は、後々どんな影響をおよぼすのだろうか？」³²と書き記し、強い不安を吐露していた。

フランスのカトリック教会も、結果的には無力に終わったものの、手を拱いていたわけではない。フランスのカトリックの高位聖職者たちの多くは当初、ペタン元帥を支持していたが、このヴェルディヴ事件以降、フランスにおけるユダヤ人の迫害に反対する姿勢を明確に示すようになる。パリのシュアール大司教は、7月22日、ペタンに対して「先週行われたユダヤ教徒の大量検挙や、冬季競輪場 [ヴェルディヴ] で彼らが受けてきた酷い扱いを聞き及んで、私たちは深く動揺し、ここに良心の叫びを上げないわけにはいきません」³³との抗議の文書を送っている。

にもかかわらず、41年に行われた最初のユダヤ人検挙の際や、ユダヤ人に対する黄色い星の着用義務化について大きく報じたメディアは、占領下での検閲に加えて、「この作戦については厳に報道を慎むべし」³⁴との指示がSS側から出されていたために、今回は沈黙してしまった。その影響もあるのか、当日のパリ市警察の報告書には「今回の作戦は、事故もなく、公衆からの特記すべき反応もなく遂行されている。ユダヤ人たちは自身は、されるがままだった」³⁵と冷ややかに記されている。

そういうわけで、たとえば、パリ解放後に対独協力者として糾弾されることはなかったものの、占領下のパリ社交界を渡り歩いていた才人ジャン・コクトーは、ナチスお抱えの彫刻家アルノ・ブレイカーを称えたりしつつ、7月17日の『日記』には、自分が携わった映画について、「昨日、『幽霊男爵』[コクトーの監督した映画] が仕上がった。小説の雰囲気うまく表現できたと思っている」³⁶と記すなど、まるで別世界に生きているかのようだ。なるほど、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、戦後出版された回想録『女ざかり』において、「ユダヤ人迫害はいよいよ大規模になった。ユダヤ人が企業を所有したり管理したり経営したりすることは、いっさい禁止された。ヴィシー政府は彼らの戸籍調査を命じ、ユダヤ人大学生にたいして登録制限の制度を設けた。何千人ものユダヤ系外国人がピティヴィエの強制収容所に入れられ、ドイツに送られ始めた」と強く憤慨している。だが、続けて「第三帝国はこれらの手段を正当化するための宣伝として、パリの映画館で『愛すべきユダヤ人』を上映させた。[...] 私たちは希望を捨てまいとはしていたが、見通しは暗かった」³⁷と記述するなど、プロパガンダの方に目が向いており、ヴェルディヴの事態からはやはりかけ離れている感がある。

ほぼ一ヶ月後、たとえ簡潔な情報だけではあっても、ようやくこの一斉検挙にかんして新聞に報道されるようになり、また、非占領地域でもユダヤ人の大規模な検挙が行わ

れるようになると、まず聖職者たちが、公に非難の声を上げるようになる。トゥールーズ大司教ジュール・サリエージュは、高位聖職者の例に漏れず当初はペタン体制を支持していたが、42年8月下旬、自身の教区で以下のような司牧書簡を読み上げるよう指示した。曰く、「キリスト教道徳というものがある。数々の義務を課し、数々の権利を認める人間の道徳というものがある。そうした義務や権利は人間の本性に由来する。それらは神に由来する。何人もそれを侵犯できない。[...] ユダヤ人たちは人間である。外国人は人間である。[...] この人たちは人類の一部であり、他の人びとと同じく私たちの兄弟である。キリスト教徒はそのことを忘れてはならない」³⁸。誤解の余地のない異議申し立てだ。そして、この動きにはモントーバンの司教なども応じるようになる。

だが、そうは言っても、反ユダヤ主義的な言辭が新聞に溢れ返っていた時代である。子供にも及ぶ今回の措置を残酷な蛮行だと批判した聖職者たちに対して、戦前から激越な反ユダヤ主義を表明し、後に対独協力者に対する裁判によって粛清されることになる作家ロベール・ブラジヤックは、9月、自らの編集する「ジュ・スイ・パルトゥ」紙に、「トゥールーズ大司教は、事もあろうに、非占領地域における無国籍のユダヤ人に対して行われた措置に抗議し、[ペタン]元帥の政府が外国に使喚され続けていると糾弾する。彼は狼藉や別離という言葉を用いているが、それは我々としては納得できない。なぜなら、ユダヤ人は皆まとめて隔離せねばならないのであって、チビどもも残すべきではないのだから。この点では人道的立場は賢慮と一致する」³⁹と書きつけたのである。大司教らの抗議は、どのような人であれ移送されてはならないという点にあり、親と子供を引き離すか否かという点にはなかったにもかかわらず、ブラジヤックは、ラヴェルと同じく「人道的」立場から、親と子供は引き離さずに移送すべきである、というのだ。

直接見聞きする以外には一斉検挙についてその直後になかなか知る術がなく、大方のパリの作家たちが占領下での日常生活を送り続け、反ユダヤ主義的作家たちがさらなる弾圧を求めている傍らで、パリの一部の作家はそれでも、この事件を見過ぎしはしなかった。フランスの敗北以降、一行たりとて出版しないと自らに誓っていたジャン・ゲーノは、ヴェルディヴ事件の数日前である7月13日に、「今朝知ったが、中央ヨーロッパのユダヤ人が全員ロシアに送られ、その子供たちは収容所に送られるという」との危機感を、『日記』（1947年刊）に綴っていたが、7月25日、「1936年、[...] フランスには3800万人の共和派がいたと考えられる。彼らはいったいどうなってしまったのだろう。ドイツ人はみなナチになってしまった。700万人のドイツの共産主義者たちはナチになってしまった。だが、私たちが彼らより優れているとは言えないだろう」⁴⁰と痛切に嘆いた。フランソワ・モーリヤックは、まだ戦争の続く43年、偽名で地下出版した『黒いノート』のなかで、妻の目撃情報に基づいて、「歴史上、いったいこの時のほかにいつ、これほどの無辜の人びとが牢獄に捕えられただろうか。いったいこの時代をおいてほかにいつ、子供たちが母親から引き離され、[...] 薄暗い朝、オーステルリッツ駅で家畜車に詰め込まれたというのか」⁴¹と激しく告発することになる。そして彼らは二人とも、パリ解放後の対独協力作家の粛清には、文字どおり人道的立場から反対するのだった。

また、ヴェルディヴ事件におけるフランス警察と同様に、占領当局も一枚岩ではなかつ

た。というのも、ドイツ国防軍の将校としてパリに赴任していた反ナチ的作家エルンスト・ユンガーが、ベールと同じ日付の『日記』のなかで、忸怩たる思いを次のように率直に書き残しているからだ。「昨日、ここでユダヤ人が逮捕され、移送された——両親がまず子供たちから切り離され、悲嘆の声が町中で聞かれた。私は不幸な人たち、骨の髄まで苦悩に満たされた人たちに取り囲まれたことを一瞬たりと忘れることができない。そうでなくても私は何という人間、何という将校なのであろう」⁴²。コクトーも含めたフランスの作家たちと交流のあった彼の力によって事態が好転したわけではないが、SSの圧力があつたとはいえ、フランス警察がさしたる抵抗も示さずに粛々と遂行したヴェルディヴ事件に強い嫌悪感を示す人物が、占領軍のなかにさえいたという事実は、かろうじて救いとも言えようか。

3. ヴェルディヴ事件の子供たち

ヴェルディヴ事件では、徹底した検挙と殺戮にもかかわらず、何人かの子供たちは生き延びることができた。ある者は、ヴェルディヴの建物から脱走し、またある者は、家族の尽力によって釈放された。

当時14歳だったガブリエル・ヴァクマンは、ヴェルディヴから脱走した一人である。彼は戦後、居を定めたメキシコで大地震に遭ったことをきっかけに、自分の過去の体験を証言すべくフランスに戻った。

ガブリエル少年は、ヴェルディヴに着いた時になって、自分が激しい恐怖を感じていることを知る。「この時まで、ガブリエルは、自分が恐怖で腹を締め付けられ麻痺していることを自覚していなかった。だがもうたくさんだ！／彼はこのひどいヴェルディヴを探検し、隅々まで知ろうと思った。自分のしたいことが間もなくはつきりしてきた。逃げるんだ！」⁴³。そしてガブリエルは、屋上から逃げられることを発見して巧みに脱出を果たすのだが、彼の証言作品では、それ以降、終戦を迎えるまでのさまざまな冒険が語られる。すなわち、彼の一家を密告しようと思っていた管理人、脱出した彼を匿ってくれたフランス人一家、非占領地域へと脱出させてくれた男性、彼を雇った農場主、彼が身を寄せたパリの職業学校の人びと、彼の参加したレジスタンス活動、そして、接収されていた過去の自分の住まいをはじめとした以前の生活がすっかり破壊されたという終戦直後に知る事実…… たとえ首尾よくヴェルディヴからの移送を逃れたにしても、ユダヤ人の、しかも孤児として、戦時下を生き延びるのは、到底容易なことではなかったのである。

そうした苦労はしかし、ヴェルディヴからボヌ・ラ・ロランドに送られた後、42年9月にドランシーで釈放された当時9歳の少女アネット・ミュレルの証言作品にはさほど見られない。彼女の場合、子供と大人を合わせて親子としてカモフラージュして移送すべく、ボヌ・ラ・ロランドから、アウシュヴィッツではなくドランシーに移されたということが、結果的に命を救うことになった。検挙を免れた彼女の父親が奔走して、UGIFの有力者で同郷のレオ・イスラエロヴィッツ（彼自身、後に移送され殺されている）

の協力を取りつけ、アネットを含む自分の子供たちを釈放させたのである。ヴェルディヴに到着した際、ガブリエルとは異なって、「奇妙なことに、私は、まるで前年に見たサーカスのように、スペクタクルが始まるのを期待していた」⁴⁴アネットは、ドラランシーから解放された後、パリ近郊のカトリックの養護施設で終戦まで過ごすことになる。だが、命の危険を冒すことなく生き延びたとはいえ、ヴェルディヴ事件の経験は、アネットに大きな傷を残す。それは、「[...] 私は、家に、アヴニール通の自分の父のところに戻った。そこは、1942年7月16日朝に私が後にした場所だ。アパートマンはとても狭く貧相で、侘しく見えた。アメリカ軍のカーキ色の毛布が乗った鉄製のベッドがいくつかあった。白木の筆筒が一つ。[...] 私は自分を異邦人のように感じていた」⁴⁵との言葉に見られるとおり、我が家に戻ってなお自らを異質なものと感じさせる類の経験だったのである。

ガブリエルとは対照的に、アネットは、一斉検挙前の黄色い星の着用義務によって、大きな壁を感じさせられたという。「教室では、皆の眼差しが私の方を向いた。/[...] 女の先生は、「皆さんのなかに2人、星を付けている人がいます。仲良くしましょうね。彼女たちと皆さんには何の違いもないはずですから」と言った。けれども瞬く間に、一つの壁ができあがってしまい、みんな離れてしまった」⁴⁶。それまでの親密な日常世界のなかに、俄かに高い壁が築かれてしまうこのような子供の苦しみは、当時14歳だったモーリス・ラジスフェスの証言作品にも読まれる。彼は、7月16日の一斉検挙において逮捕されるが、パリ近郊のヴァンセンヌ警察による、14歳から16歳のフランス国籍のユダヤ人を釈放するという当日の偶発的な指示によって、辛くもヴェルディヴの惨状を知ることなく生き延びることができ、後に、フランスにおけるユダヤ人虐殺の研究者となる。その彼は、自分も身に着けさせられた黄色い星について、「僕は、全世界が一致団結して自分に敵対してきたと思っていた。[...] 沈黙されることの方がきつかった。というのも、人の目が、腹黒さからではなく——この点は間違いない——、マークされたばかりの人間を正面から見ることの恐怖から、僕の方を見ないようにしていると感じたからだ」⁴⁷と記している。彼もまた、黄色い星がもたらす寄る辺なき、孤独感に深く苛まれていた。

このように、当時子供だった彼ら彼女らが描き出すのは、次第にユダヤ人に対する締め付けが強まるドイツ占領下のパリにいながら過ごされていた日常であり、直接経験した子供による日常生活の細やかな観察の記憶なのである。そしてそこから見えてくるのは、現実の多面性や複雑性にほかならない。

たとえば、ガブリエルは、ヴェルディヴに収容されながらも、「ピッチには子供たちの一団がいて、踊っている女の子や男の子さえいた」⁴⁸と述べているが、アネットも「時々、拡声器から子供たちを叱る声が聞こえてきた。「トラックを走ってはいけません」。それはヴェルディヴでの遊びになってしまっていて、子供たちは駆けっこをしたり、傾斜のついた競輪場を上ったり下ったりしていた」⁴⁹と異口同音に記している。あるいは、ガブリエルの伝える、ヴェルディヴから子供たちだけでも自分と一緒に脱出する道を探ろうという自身の提案を耳にした彼の叔母が発する、「あんたは母親から子供を取り上げるといふのかい？ 男たちは労働収容所に行くことになるだけよ。そして女と子供は解

放されるんだわ」⁵⁰との怒りに満ちた言葉は、たしかに今日の読者から事後的に見ればあまりにナイーヴだと見えてしまうが、しかし藁にも縋るような思いでその瞬間を生きていた人びとにとっては、他に考えようのない状況だったのだ、ということを理解させてくれる。これらの記述は、汚物で溢れたトイレなどといった惨状の描写だけでは窺い知ることのできない、ヴェルディヴの多様な現実の一面である。

そして、警察の報告書では、先述のように「今回の作戦は、事故もなく、公衆からの特記すべき反応もなく遂行されている。ユダヤ人たちは自身は、されるがままだった」と簡潔にまとめられてしまう検挙についても、子供たちによる観察は、細かいがゆえに読者の印象に強く残る。アネットは警官を前にして泣きながら、「私は、マリ＝クレールっていうこのお人形を牢屋に持ってくの」と言ってみるが、その警官は、「その人形を腕からひたくり、ベッドに放り投げた」⁵¹。また、モーリス少年は、逮捕された時の様子を「お前たちは5分で荷物を用意しろ。余計なものを持って行くんじゃないぞ！」僕たちは急いで服を着た。真夏だというのに、母は暖かい服を着るようしつこく言った。こんな細かいことは興味を惹かないだろうし、錯乱したものとさえ見えかねないけれど、僕が忘れられないのは、自分が履かされた新品の靴のことで、それで僕はすぐに足が痛くなってしまった、ということなのだ。この日一日、僕にとって本当に苦痛だったのは、この靴だったのだ」⁵²と記している。生死を分けかねない決定的な瞬間であるにもかかわらず、あるいはだからこそ、この子供たちの研ぎ澄まされた感覚は、歴史的事態の重大さよりも、自分の周囲の事柄に集中している。

ボヌー・ラ・ロランドでの母親とアネットの最後の晩は、それが最後になるとはそのとき本人たちは知らなかったがゆえに——そして読者には最後だと分かっているがゆえに——、痛切に記憶に留まることになる。多くの人でごった返す収容所内で、アネットの母はどうかこうにか自分たちの寝床を確保するが、そこは、水が滴り落ちて藁が濡れている場所だった。

「誰がママの横で寝るの？」と母は尋ねた。ミシェルと私は話し合った。どちらも、ママの傍では眠りたくなかった。水滴が頭にかかるのが嫌だったのだ。ママは言った、「あんたたちは、水がかかるくらいなら、ママの横で寝なくてもいいと言うのね。」後になって、私はいったい何度、こう言うママの優しい声を聞いたことだろう。「誰がママの横で寝るの？」そして、すぐにママの横に行き行って抱きしめなかったことをどれほど後悔したことだろうか。」⁵³

ぼたりぼたりと藁束にわずかに滴る水。普段であれば気にも留まらないほんの小さな細部なのだが、それがアネットには決定的な意味をもってしまったのだ。そしてその「後悔」は、ずっと彼女に付き纏うことになる。

また、見逃すことのできない点は、子供によって観察された細部の記録だけに、そこには率直な感想も記されているということだ。これらの証言作品は、とかく悲惨な体験談として捉えられかねないが——むろん、そうした読解の重要性は否定できない——、

そこに複雑な現実の多面的な受容が描かれていることには注意を払わねばならない。戦争直後も数年間、児童養護施設に入所していたアネットは、そのなかの先生の一人について、「戦争中の思い出のことを尋ねながら、彼女の目はたちまち曇ってくるのだった。彼女は、私たちの話を聞きながら、私たち以上に苦しんでいるように見えた」と伝えているが、「それで私は笑いたくなかったものだ」⁵⁴と言う。類似の経験を経していない人間が、悪意からではなくむしろ心からの善意に基づいてきわめて安易に同情を向けてしまうことに対する、当事者の居心地の悪さが、ここにははっきりと描かれている。このような記述の多面性は、図式的な整理や安直な理解を厳しく禁じるものだ。

このような当時の子供たちの記述には、さらにいくつかの共通点が認められる。第一に、検挙前の彼ら彼女らが一様に貧困に苦しんでいる、という点だ。先述のように、ヴェルディヴ事件で検挙対象となったのは外国籍のユダヤ人とその家族だったが、その子供たちの親は主として、1920年代から30年代にかけて、ポーランドをはじめとする東欧からフランスに移住してきた人びとである。ガブリエルもアネットもモーリスも、親がポーランドからフランスに移り住んだ家庭だった。「1930年代頃、移民の最後の波を形成していたポーランドからのユダヤ人は、すでにフランスに移住していたロシアやドイツからのユダヤ人よりもはるかに劣った人びとと見なされており、完全に同化したまさに「貴族」とも言えるフランスのユダヤ人には、まったく相手にされなかった」⁵⁵とアネットは述懐し、モーリスもしばしば、自分の住んでいた家の狭さや貧しさを描写している⁵⁶。ここに、たとえば、自身も最終的にアウシュヴィッツで殺されるとはいえ、UGIFで働き、ヴェルディヴ事件の対象にはならなかった——たとえ先述のようにヴェルディヴ事件に際して深刻な危機感を抱いたにせよ——エレヌ・ベールとの立場の相違がある。彼女の父はフランスのエリート校出身で、第一次大戦にはフランス兵として従軍しており、母もまた、昔からフランスに住むユダヤ系フランス人だった。要するに、エレヌは「完全に同化した」ユダヤ系フランス人だったのである。この点一つ取っても、フランスのユダヤ人に対する迫害といった単純な枠組みでヴェルディヴ事件を捉えられないことが理解される。

そして、より興味深いことに、その頃子供だった彼ら彼女らは皆、強制収容所からの生還者たちがしばしば解放直後から夥しい数の証言を残したのとは対照的に、ある程度の時間を置いてから自らの体験を語り始めるのである。ヴェルディヴ事件ではないものの、6歳の頃、ボルドーで1944年に行われたユダヤ人検挙の際に逮捕されながら、脱走に成功して生き延びたボリス・シリェルニクは、自身の経験を、2010年にまずは三人称の物語として、次いでようやく2012年に一人称の証言として、すなわち自分の事柄として語るに至った。「私の悲惨な子ども時代は、例外的な出来事だったのだ。戦争中に話したのなら、私は殺されていただろう。ところが平和な時代に話したら、今度は信じてもらえなかったのだ」と記す彼は、トラウマ的経験を語ることで乗り越えるのを「凍った言葉が溶け出す」⁵⁷と表現する。つまり、自分たちの証言に耳を傾ける雰囲気が社会に醸成され、自分の経験を表現するなま生の言葉が口から出てくるには、氷が融けるのを待つように時間が必要だった、というのである。アネットもまた、「子供というのははっ

きり覚えていないものだ…」だとか「子供は別に苦しまなかった…」といった類の言葉を耳にしてきており⁵⁸、自分の経験談を出版するには、実に1991年まで待たねばならなかった。少年だったモーリス・ラジスフスも、「証言する必要をはっきりと意識したのは50歳頃のことだ」⁵⁹と、自分が証言するまでに長い時間を経ねばならなかったことを明かしている。

ここで想起されるのは、人間の活動力を、生命過程を可能にする「労働」、道具の世界を作り上げる「仕事」、そして意味を生み出す「活動」に分けた、ハンナ・アレントの次のような言葉である。「真実の物語と虚構の物語の違いは、まさに後者が「作り上げられる」のにたいして、前者はけっしてつくられるのではないという点にある。[…]この物語が暴露する「ある人」だけが主人公である。そして、他人と異なる唯一の「正体」は、もともとは触知できないものであるが、活動と言論を通じてそれを事後的に触知できるものにするのができる唯一の媒体、それが真の物語なのである」⁶⁰。どのような人間であろうとそれぞれの人生はかけがえがないわけだが、そのかけがえのない意味や意義が見出されるのは、そして、その人生を生きた人がどのような人間だったのかが理解されるのは、あくまで、その人の人生なる「真の物語」が語られ聞き取られる「事後」でしかないというのである。ガブリエルは、歴史の波に呑み込まれながらも、大地震のなかで死が再び身近に迫ったときに初めて、自身の過去を語ろうという決意を抱いた。アネットは、ヴェルディヴ事件を扱った映画『ルーヴルの切符売場』が公開された1970年代、誰にも自分の話を聞いてもらえないなかで、しかしいつか誰かに聞き届けられるべく、自分だけの経験と記憶を書いた。そうしなければ、その頃にはまったく言及も研究もされていなかったボヌ・ラ・ロランド収容所が、そしてその収容所を経た自分の経験が、知られぬまま存在しなかったことにされてしまうからだ。

この点からすれば、彼ら彼女らの証言作品は、出版され読まれるのに時間がかかったとは言うものの、まさしく自分たちが戦後を生きること、そして生き延びるということと一体化しているのだと言えるだろう。

4. 結びに

ピティヴィエとボヌ・ラ・ロランドの資料を集める CERCIL (ロワレ県中継収容所研究センター) の展示室を訪れた作家の小野正嗣が、「この記憶の場所で私たちを深く動揺させるのは、そこにあるということはその無残な死にほかならない子供たちの写真以上に、写真のない子供たちの多さなのである」⁶¹とその印象を記しているように、そして、当事者たるアネットが、「1942年7月、ユダヤ人の子供4000人がいた。彼ら彼女らは、私と同じように、いろいろな夢を抱いていたのだ」⁶²と記しているように、彼ら彼女らの個人的な証言の背後には、そこには存在しない膨大な数に上る、死せる個々の具体的な沈黙がつねに控えている。彼ら彼女らの証言作品が記憶に留めて証言してくれる、大きな歴史の記述からはつねに零れ落ちてしまう日常的で個人的な細部こそが、かえって、類似した経験であるかもしれないがそれでも各々がかけがえのない経験をした

であろう、他の多くの不在の人びとを想像させるのだ。アネットと同じように、自分だけのお気に入りのぬいぐるみを持って行こうとした少女はほかにもいるだろうし、モーリスと同じく、新品の靴を履き、用心して夏なのに暖かい服を着込まされた少年がいたかもしれないのだ、と。

それにしても、ヴェルディヴから逃れることのできなかった子供たちが収容されたピティヴィエやボヌ・ラ・ロランド収容所の実態は、どのようなものだったのだろうか。そして、子供を虐殺するということの孕む、この特異な残酷さは、どこに由来にするのだろうか。これらの問いについては、さらなる検討が必要だろう。

(本論は、JSPS 科研費 課題番号21720127, 26370369の助成を受けたものである)

¹ 第二次大戦期のナチスによるユダヤ人虐殺を指す言葉として「ホロコस्त」という用語が広く用いられているが、これはもともと獣を焼いて神に供える「燔祭」を意味した言葉である。アウシュヴィッツから生還したユダヤ系イタリア人プリーモ・レーヴィのように、戦後、神を信じなくなった人びともいることに加えて、この虐殺を——主としてアングロ・サクソンの国で行われているように——「ホロコस्त」と呼んでしまうならば、殺された人びとは神への捧げ物になりかねない。そこで筆者は、ヘブライ語で「破局、絶滅」を意味する「ショアー」、あるいは民族や宗教などある特定の集団の抹殺を一般的に意味する「ジェノサイド」を用いている。これらの用語の用法がそれだけで一つの態度表明となる点については、Ivan Jablonka, Annette Wiewiorka, *Nouvelle perspective sur la Shoah*, PUF, 2013を参照。

² 渡辺和行『ナチ占領下のフランス』講談社、1994年、p.137

³ フランスのユダヤ人の福利を目指して在仏ユダヤ人の代表権を認められた組織。この組織に代わって、同時代を生きた歴史家のマルク・ブロックが、ユダヤ人を隔離して「事実上のゲットー」を準備するものだと当初から強く反対していた。「UGIFは、ユダヤ共同体の統括と同時にユダヤ人の財産の「アリア化」を進める役割を果たさざるをえず、ドイツの反ユダヤ主義政策の枠組みに次第に入り込んでいくことになる」(Marc Bloch, *L'histoire, la guerre, la résistance*, Gallimard, coll. Quarto, 2006, p.686)。ヴェルディヴ事件以降、UGIFに世話されていた子供たちも最終的に殺されることになったのだが、UGIFが、凶らずもフランスのユダヤ人虐殺に際して果たした役割——UGIFによって虐殺が最小限に食い止められたのか、あるいはUGIFによってユダヤ人がより容易に虐殺されることになったのか——については、現在でも議論がなされている。

⁴ Maurice Rajsfus, *La rafle du Vél d'Hiv*, PUF, coll. Que sais-je ?, 2002, p.79

⁵ *Ibid.*, p.26。「避難 (évacuation)」とはナチス特有の語法の一つで、「移送」、すなわち強制収容所への移送を意味する。

⁶ Serge Klarsfeld, *La Shoah en France*, tome 1, *Vichy-Auschwitz*, Fayard, 2001, pp.119-120

⁷ *Ibid.*, p.116

- ⁸ *Ibid.*, p.121
- ⁹ そうした仮説については, *ibid.*, pp.117-118. またこの頃, パリ大司教エマニュエル・シュアールが, 在仏ドイツ大使のオットー・アベッツに対して, 子供と親の別離を想定したユダヤ人の一斉検挙に反対する姿勢を示していたことから, ラヴァルは, カトリック界からの公式な反対を恐れたとも言われている (Cf. Sylvie Bernay, *L'église de France face à la persécution des Juifs 1940-1944*, CNRS éditions, 2012, p.322)。
- ¹⁰ La circulaire d'Emile Hennequin du 12 juillet 1942, in Serge Klarsfeld, *La Shoah en France*, tome 2, *Le calendrier de la persécution des Juifs de France*, Fayard, 2001, p.491
- ¹¹ Gabriel Wachman, Daniel Goldenberg, *Evadé du Vél d'Hiv*, Calman-Lévy, 2006, p.46
- ¹² Claude Lévy, Paul Tillard, *La grande rafle du Vel d'Hiv*, Tallandier, 2010, p.51
- ¹³ Archives du Centre de documentation juive contemporaine (CDJC), XXVIII a-31 ; cité par Maurice Rajsfus, *op.cit.*, p.37. そしてこのボールもまた, 家族もろとも1943年12月にアウシュヴィッツで殺されることになる。
- ¹⁴ Claude Lévy, Paul Tillard, *op.cit.*, p.56
- ¹⁵ *Ibid.*, p.51
- ¹⁶ Annette Muller, *La petite fille au Vel d'Hiv*, Livre de poche, 2012, p.62
- ¹⁷ Claude Lévy, Paul Tillard, *op.cit.*, p.53
- ¹⁸ Gabriel Wachman, Daniel Goldenberg, *op.cit.*, p.50
- ¹⁹ Anette Muller, *op.cit.*, p.64
- ²⁰ Archives de la préfecture de police, série BA-1816 (B51) ; cité par Maurice Rajsfus, *op.cit.*, p.54
- ²¹ Extrait d'un texte présenté par Georges Welters, in *Le monde juif*, n°22-23, juillet 1949 ; cité par Maurice Rajsfus, *op.cit.*, p.65
- ²² Lettre de Rachel Polakiewicz du 17 juillet, in Karen Taieb, *Je vous écris du Vél d'Hiv : les lettres retrouvées*, Robert Laffont, coll. J'ai lu, 2011, p.98
- ²³ *La persécution raciale*, Service d'information des crimes de guerre (Office français d'édition, 1947) ; cité par Maurice Rajsfus, *op.cit.*, p.67
- ²⁴ Eric Conan, *Sans oublier les enfants*, Livre de poche, 2006, p.28
- ²⁵ Cf. Serge Klarsfeld, *op.cit.*, pp.133-134
- ²⁶ Eric Conan, *op.cit.*, p.66
- ²⁷ Annette Muller, *op.cit.*, pp.77-78
- ²⁸ *Ibid.*, pp.73-74
- ²⁹ Serge Klarsfeld, *op.cit.*, p.159
- ³⁰ Eric Conan, *op.cit.*, p.143
- ³¹ 本章の一部は, 安原伸一朗「ヴェルディヴ事件とパリの作家たち」(『ふらんす』2012年7月号, 白水社) と重複している。
- ³² 『エレヌ・ベールの日記』飛幡祐規訳, 岩波書店, 2009年, p.104 (強調は原文)
- ³³ Sylvie Bernay, *op.cit.*, p.325

- ³⁴ CDJC, XLIX-67 ; cité par Maurice Rajsfus, *op.cit.*, p.83
- ³⁵ Rapport du directeur de la Police Municipale, in Serge Klarsfeld, *Le Shoah en France*, tome 2, *op.cit.*, p.542
- ³⁶ Jean Cocteau, *Journal 1942-1945*, Gallimard, 1989, p.184
- ³⁷ シモーヌ・ド・ボーヴォワール 『女ざかり』 下巻, 朝吹登水子・二宮フサ訳, 紀伊国屋書店, 1963年, p.112
- ³⁸ Lettre pastorale de Jules Saliège, cité par Sylvie Bernay, *op.cit.*, pp.345-346
- ³⁹ Robert Brasillach, *Oeuvres complètes*, tome XII, Le club de l'honnête homme, 1964, p.481
- ⁴⁰ Jean Guéhenno, *Journal des années noires 1940-1944*, Gallimard, coll. Folio, 2002, p.271, p.275-276
- ⁴¹ Forez (pseudonyme de François Mauriac), *Le cahier noir*, Minit, 1943, pp.39-40
- ⁴² エルンスト・ユンガー 『パリ日記』 山本尤訳, 月曜社, 2011年, p.128
- ⁴³ Gabriel Wachman, Daniel Goldenberg, *op.cit.*, p.55. なお, 本書は, ガブリエルが記した一人称の証言を, 作家ダニエル・ゴルダンベールが三人称の物語にした作品である。
- ⁴⁴ Annette Muller, *op.cit.*, p.67
- ⁴⁵ *Ibid.*, p.157
- ⁴⁶ *Ibid.*, p.58
- ⁴⁷ Maurice Rajsfus, *Opération étoile jaune suivi de Jeudi noir*, Le cherche midi, 2002, p.140
- ⁴⁸ Gabriel Wachman, Daniel Goldenberg, *op.cit.*, p.63
- ⁴⁹ Annette Muller, *op.cit.*, p.68
- ⁵⁰ Gabriel Wachman, Daniel Goldenberg, *op.cit.*, p.65
- ⁵¹ Annette Muller, *op.cit.*, p.64
- ⁵² Maurice Rajsfus, *Opération étoile jaune suivi de Jeudi noir*, *op.cit.*, pp.143-144
- ⁵³ Annette Muller, *op.cit.*, pp.72-73
- ⁵⁴ *Ibid.*, p.131
- ⁵⁵ *Ibid.*, p.13
- ⁵⁶ Cf. Maurice Rajsfus, *Opération étoile jaune suivi de Jeudi noir*, *op.cit.*, pp.146-150
- ⁵⁷ ボリス・シリュルニク 『憎むのでもなく, 許すのでもなく』 林昌宏訳, 吉田書店, 2014年, p.92, p.303
- ⁵⁸ Annette Muller, *op.cit.*, p.5
- ⁵⁹ Maurice Rajsfus, *Opération étoile jaune suivi de Jeudi noir*, *op.cit.*, p.132
- ⁶⁰ ハンナ・アレント 『人間の条件』 志水速雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年, pp.301-302
- ⁶¹ 小野正嗣 『『ヴェルディヴの少女』, そして CERCIL について』 『ふらんす』 白水社, 2012年 7月号, p.18
- ⁶² Annette Muller, *op.cit.*, p. 59

Résumé

De la persécution des Juifs en France sous l'Occupation, la rafle du Vél d'Hiv en juillet 1942 est sans doute la plus connue, notamment pour sa cruauté envers les enfants : après avoir arrêté presque tous les Juifs étrangers dans la région parisienne, la police française sépare les enfants de leurs parents aux camps de Pithiviers et de Baune-la-Rolande, et finit par les déporter séparément vers l'Est. Certes, les arrestations s'exécutent pendant la journée, il n'existe cependant guère d'écrivains parisiens de cette époque qui s'indignent contre cette décision terrible à quelques exceptions comme Jean Guéhenno ou François Mauriac, tandis que Robert Brasillach, écrivain antisémite, insiste sur la nécessité de déporter tous les Juifs en masse. Malgré le silence presque total de la presse sur la rafle à cause de la censure, certains prêtres – même s'ils sont souvent pétainistes – commencent à protester publiquement contre la persécution des Juifs en France. Quant aux témoignages des enfants survivants, dès lors qu'ils décrivent minutieusement avec leur regard d'enfants les jours au Vél d'Hiv ou aux camps, ils montrent divers aspects ainsi que des détails quotidiens de cet épisode historique, et nous permettent d'imaginer qu'il y eut beaucoup d'autres enfants déportés ou assassinés.

